

はじめに 重要なこと

「何のお仕事をされてるんですか?」。アメリカ人の看護師がイギリス人のデレク・パーフィットに訊ねた。二〇一四年の秋にこの哲学者がニュージャージー州で入院したときのことだ。パーフィットは大変な状態にあった。激しく咳込み肺が機能しなくなり、ほとんど死にかけていた。消耗しきって、七十一歳で生涯を終えるかのようにだった。ほとんど話もできない。そこへ心配した見舞客たちがこの白髪の患者に会うために列をなしてやってくる。何事かと思つた彼女がそう訊いたのだ。彼はしわがれ声で答えた。「私は重要なことについて仕事をしています」。

* * *

『重要なことについて』はパーフィットの二番目の著書であり、最後の著書でもある。最初の著書は『理由と人格』だ。つまり著書はわずかに二つということになるが、その二つだけで「この一世紀に現れた最も偉大な道徳哲学者の一人」という評価を、政治哲学者や道徳哲学者にすっかり定着させたのだ。もちろん、誰もが賛同するわけではない。辛辣な批判者もいた。しかしこの評価は広く受け入れられている。それどころか、パーフィットを同邦の哲学者ジョン・スチュアート・ミル(一八〇六—七三)、へ

ンリー・シジウィック（一八三八—一九〇〇）以来、最も重要な道徳哲学者だと考える人たちもいる。だがパーフィットがそもそも一冊でも刊行できたことは、彼のことを知る人にとっては驚きだった。「パーフェクト」という言葉は中世英語の「parfit」に由来すると言われる。まさに究極の完璧主義者だった彼にふさわしい名前だ。パーフィットの完璧主義はいつもトラブルを招き寄せることになった。原稿に満足できないと言っては、締め切りもくり返し破った。

『重要なことについて』は最終的に全二巻千四百四十ページ（死後刊行の第三巻も入れると千九百ページ）に及ぶ。『理由と人格』は、だいたい軽量級で、たった五百三十七ページしかない。しかしパーフィットの著書は不朽の名著だと評されている。さらにパーフィットは約五十編の論文も残し、平等や「人格の同一性」——ある人格を時間経過を通じて同一の人物たらしめるものがあるとしたら、それは何か——を含め、数多くのテーマの出発点となる重要な貢献をなした。パーフィットの思考はすべての人間に関係して日常的にも使われる可能性があり、刑罰や資源の分配、未来への計画について、私たちの考え方も変えることになる。

* * *

本書は、二十世紀後半から二十一世紀初頭の大学生活と哲学研究の肖像画であるとともに、成人したパーフィットが生涯の大部分を過ごしたオール・ソウルズ（「コレッジ」）というユニークな組織の素描でもある。だが本質的には一人の人物についての本だ。

パーフィットは伝記作家にとって難題だった。本書を書きはじめた頃、私はパーフィットがどんな人物か完璧にわかったつもりでいた。パーフィットの性格も行動も態度の理由も、理解できていると思っ

ていたのだ。しかしパーフィットについて話してくれる人たち、特に哲学者になる前の彼を知っていた人たちが増えれば増えるほど、最初の見立てが根本的に間違っていたと思うようになり、頭をかきむしりながら書き直すことになった。それからパーフィットの生涯にまつわる物語は私を悩ませつづけた。最後に私はもう一度決心し直した。「人格の同一性は重要なことではない」と主張した人物の性格と格闘する伝記作家とは、なんとたる皮肉だろうか。

伝記作家にとって、パーフィットは悪夢であり、かつ理想でもある。彼の人生は見方によれば何の變哲もない。回廊に閉ざされた生涯だった。文字どおり、イートンの回廊から、ベイリオル、オックスフォード、ハーヴァード、オール・ソウルズという回廊に至る人生。そこにあるのは、哲学の書物と論文の読書と討論と執筆だ。これでは刺激的な本にはなりそうもない。だがその一方、パーフィットの少なくとも後半生は桁外れの奇人伝だ。愛すべき人物であると同時に、変人だったのだ。私は膨大な逸話の海で溺れそうになった。

取材で集めた膨大な情報をきれいにまとめあげるのはかなりの大仕事だった。大まかには年代順の時系列で話は進むが、一九七〇年頃からパーフィットの生活にはいろいろな恒例行事が入り込んできた。毎年、ベネチアとサンクトペテルブルク写真撮影旅行しかり、ハーヴァードとニューヨーク大学とラトガースでの講義しかり。学生たちもいた。こうした話を行ったり来たりしてしまわないように、後半生については一部、テーマ別に行っている。

パーフィットの生涯を描くにはこの構成があっていたようだ。前半生はいろいろなことに興味をもち、好奇心にあふれ多種多様な活動をしたが、後半生は数少ない限定的な対象にのめり込み、それらともしだいに断絶するようになっていった。若い頃にはたくさんさんの生命があり、長じてからはたくさんさんの哲学

があった。パーフィットの哲学以上に私が彼に惹かれるのは、価値あるなにかしら——彼の場合は重要な哲学的問題を解決したいという衝動——を、ほかのどんなことよりも実際に優先させてみせてくれた極端な実例でもあるからだと思う。

パーフィットはほかの哲学者たちとの学問上の意見の相違に、最後の二十五年間を苦悩して過ごした。特に、多くの哲学者が真剣に「道徳を支持する客観的な根拠は存在しない」と考えていることにますます困惑するようになっていった。そうしてパーフィットは「世俗的道德——神なき道德——は客観的であり、そこには理性的な基礎がある」ということを自分が証明しなければならぬのだと思ひ込むようになった。動物や花や滝や書物やパソコンについての事実があるのとまったく同じように、道徳についても事実があるというのだ。

もし自分がこの証明に失敗したら自分の存在は無意味だったことになる。パーフィットは本当にそう信じていた。それも自分の存在だけではない。もし道徳が客観的でなかったら、人間の生はすべて無意味になってしまう。そして「道徳を支持する客観的な根拠は存在しない」という主張を論駁し、道徳を救い出さなければならぬという強迫にも似た思ひは、彼の知性だけでなく感情にも重い負担となった。パーフィットがどのようなこの重荷を背負うようになったのか、またその重荷が早熟で外向的な歴史学専攻の学生から、道徳の最難問の解決にとりつかれた隠遁的な哲学者へとどのように彼を変えたのか。これが本書の主題である。

* * *

デレク・パーフィットと私の個人的な関係を告白しておかなければならぬだろう。彼とごく親しか

ったわけではないが、彼は私が一九八七年にオックスフォードの哲学学位 (Ph.D.) をとった際の、論文の共同指導者だった。彼に論文指導を依頼するような勇気が私になかったことはたしかだから、もう一人の指導教員であり、私の学部生時代の恩師、サビーナ・ロヴィボンドの発案だったにちがいない。彼女はパーフィットとはみごとに異なるタイプの思想家でもあった。しかしデレクを選ぶのは理の当然だった。私がテーマに選んだ「未来の人びと」——いまだ生まれていない人びと——に関する倫理的問題についてデレクが果たした役割はとて大きく、彼が道徳哲学のこの分野を作り出したのだ。その後、この論文の目標は「非対称性問題を解決する」になり、自分では解決できたつもりだったのだが、デレクの意見は違った。

本当のことを言うと、当時会ったときのことを私はほとんど記憶していない。実際に会ったのはおそらく三回か四回にすぎなかっただろう。覚えているのは、オール・ソウルズのバッククアッド〔中庭〕第十一階段の石段を登っていくときの緊張である。どういうわけか、自分が座ったソファだけは覚えていいる。彼の赤いネクタイも思い出す。そして長く、波打つ、すでに白くなりかかった髪を。そのときパーフィットはまだ四十代だったのだが。

私もむろん『理由と人格』を読んでいた。わずか三年前に出版されたばかりだったが、大多数の人たちと同じく、私もわくわくし、そして衝撃を受けた。この偉大な人物に対する畏怖の念はごく大きかった。だがそんなに不安がる必要はなかったのだ。彼は私の原稿を注意深く読んで、辛抱強く私と議論してくれた。相手がただの大学院生にすぎないということは、彼にとってはどうでもいいことのようにだった。

本書の執筆にとりかかったとき、私は自分の論文をまた読み直してみた。それは短い謝辞から始まる。

私は心からの感謝を、共同指導教員のサビーナ・ロヴィボンドとデレク・パーフィットに捧げる。両者があらゆる根本的な論点についてことごとく意見を異にするという、ほぼ超能力のような不思議な能力に慣れてからは、彼らの公平で詳細な批判から多くを得ると同時に、非常に熱意に励まされた。

哲学へのデレクの熱意は少しも冷めることがなかった。

私の歩んだ道は長いことふたたびデレクと交わらなかつたが、しばしば彼の声だけは聞いていた。私はBBCに就職したものの哲学への思いを捨てきれず、社会人しながら博士課程に入り直したのだ。今度のテーマは差別の哲学で、指導教員はデレクのパートナーであるジャネット・ラドクリフ・リチャーズだった。北ロンドンのタフネルパークのジャネットの家で議論をしていると、いつもオックスフォードからの電話が割り込んできた。デレクの特徴的な、バリトンというにはやや高く、テノールというにはやや低い声が電話越しに聞こえてきた。「今は話せないのよ。デイヴィッド・エドモンズがいるの」とジャネットは言ってくれたが、デレクが私のことを覚えていたかどうかは疑わしい。

博士課程にいたのは一九九〇年代だった。二〇一〇年になって、私はジャネットに照会状を書いてもらって「実践倫理のためのウエヒロ〔上廣〕センター」に加わった。このセンターはオックスフォード大学哲学部の一部門で、ジャネットは二〇〇七年にそこに異動していた。私はセンターの卓越研究フェローの資格をもらい、最初の数年間は毎週通って、共有オフィスに入るたびにドアに印刷された四人の名前を見ては、小さなドーパミン効果に浸っていた。というのも、そこには私とジャネットの名前と並んで、D・パーフィットの名前もあったのだ。ただし姿はまったく見せない。自宅の方がよかつたのだ

ろう。ときどきは、自分が（決して現われない）同僚と同じオフィスにいることを自慢させてもらった。

もう一つ個人的な逸話を書いておこう。『タイムズ』に書いたパーフィットの追悼記事で短くまとめた話だ。二〇一四年のこと、『プロスペクト』誌で世界で最も重要な思想家を選ぶ投票があった。その最初の候補者リストにはジャネットとデレクの両方の名前が載っていた。この手の企画によくあるようになけつこういい加減なリストで、ジャネットはひねくられて腹を立てた——自分の名前があるのはポリテイカル・コレクトネスとアフアーマティブ・アクションのせいだと言って。そんなこともあったにせよ、私は『プロスペクト』に連絡して、そのリストにある二人がごく親しいことを知っているかと聞いてみた。編集部は知らなかった。そこで私は長文の記事を依頼され、編集部はその記事に「理性とロマンス——世界一知性的な結婚」というタイトルをつけた。

この記事の取材で、私はジャネットとデレクをタフネルパークに訪れた。デレクは個人的な質問も受けてくれたがすぐに退屈がって、哲学の議論になると楽しげに身を乗り出してきた。そんな哲学話を私は持参のノートパソコンで必死になってメモした。

しばらくして原稿を仕上げ、ジャネットとデレクのところへ送った。事実関係に誤りがないか確認したかったからだ。書き上げるまでに数日かかり、かなりの重労働だったが、自分では書き上げて満足していた、いや、出来もよいと思っていた。送信後、私は妻と散歩に出てゆっくり歩き回り、丘の頂上に登ったところで、自分の携帯電話にeメールが届いているのに気づいた。デレクからのメモだった。

親愛なるデイヴィッド

お元気だと思えます。

メッセージを添付します。気に入らない内容ではないかと恐れています。その点をお詫びします。
敬具 デレク

激しく動揺した私は、家に駆け戻って添付ファイルを開いた。そこにはこの記事の公表を思いとどま
ってほしいという依頼と、誤りと誤解を指摘した長大な一覧があった。胸をどきどきさせてその指摘を
読みはじめるとちに、私の不安は当惑に変わる。最初の「誤り」なるものは原稿になかったからだ。二
番目の「誤り」もなかった。三番目のも。さらには四番目も五番目も。私は自分の当惑を説明してデレ
クに書いて送った。

そしてすぐ事情はわかった。私がデレクに送ったのは記事の原稿ではなくて、タフネルパークでの議
論を聞きながら私がとったノートとメモだったのだ。『タイムズ』の追悼記事に書いたように、デレ
ク・パーフィット以外誰一人として——誰一人として——「この不可解な文章が雑誌に掲載されるもの
とは思わないだろう。しかしもし誰かが彼に、「意味をなさない文章の寄せ集めが高名な雑誌に載るこ
とになっている」と言ったら、彼はそれをそのまま信じるのである」^{*}。

この件は無事に一件落着した。パーフィットは原稿を読んで喜んでくれたのだ。要求された唯一の変
更点は、ジャネットの最新刊『臓器移植の倫理——なぜ不注意な思考が命を奪うのか』への絶賛書評、
『本書は最高の応用倫理だ』ピーター・シンガー』といったフレーズをいくつか入れてほしいというリ
クエストだけだった。

* * *

『プロスペクト』誌はパーフィットを世界で最も重要な思想家に入れたが、彼は「フィロソファーズ・フィロソファー」であつて、世に知られた哲学者でもなければ、万人向けの哲学者でもなかつた。世の中には、特別に深遠ではないものの、広く関心を集める事柄について話題を振りまき、有名になつた哲学者もいる。公的な発言や活動をすることによつて知名度をあげた重要な思想家も何人かいる。近年ではバートランド・ラッセルがそうした思想家の一人だろう。ラッセルの名声を築いた高度に専門的な哲学書を読んだ人はほとんどいないはずだ。パーフィットは教室のドアの外側にある現実の問題を基礎に思考を続けたが、メディアのインタビュに答えたり、論壇で論説や意見を書いたり、政治家や政治オタクに教えを垂れたりすることで話題に加わりはしなかつた。社会運動をしなかつた。ソーシャルメディア上に存在しなかつた。決して名声を求めなかつた。それゆゑ哲学の外界では事実上知られていない。

私は本書によつてこの不公正な現実を少しでも匡正したいと望んでいる。そしてまた、あのニュージャージー州の看護師への返事が真実だつたのだと証明したい。彼は本当に重要なことについて仕事をしたのだ。